

2 瓦 塚 類

9次にわたる発掘調査によって出土した瓦塚類のうち、大部分は丸瓦・平瓦が占める。ついで軒丸瓦・軒平瓦が多く、そのほかに少量の面戸瓦・隅木蓋瓦・鬼瓦などの道具瓦と塚がある。

軒瓦は873点出土し、54型式110種に分類できる。1984年3月現在、平城宮・京内から出土し

- * た軒瓦は150型式485種（軒丸瓦80型式263種、軒平瓦70型式222種）あるが、そのうち1/4ほどが出土したことになる。宮内他地域と比較したばあい、総点数のわりに型式・種が多く、特定の型式・種に集中しないことが指摘できる。たとえば、第1次大極殿地域では総点数4591点あるがその内訳は68型式152種であり、また内裏北外郭地域では3399点で56型式120種なのである。

出土した軒瓦873点を1aあたりに換算すると3.03点になる。馬寮地域の内・外に分けると、出 土 量

- * 馬寮外が1aあたり4.26点であるのに対して馬寮内では2.60点、建物の稠密な馬寮内北半部に限っても2.65点に過ぎない。これを平城宮内の他地域における軒瓦出土量と比較すると、内裏北外郭では17.7点、朱雀門周辺では5.7点、内裏内郭では5.1点、推定宮内省大膳職では5.0点であるから、馬寮地域では極めて少ないとわかる。瓦葺とみられる一般の寺院遺跡では1aあたり10点を越すことからみて、瓦葺建物は極めて少なかったと考えられる。ただし、丸・
- * 平瓦が少なからぬ量出土しているので、木瓦葺建物が全く存在せず棟にだけ瓦を用いた檜皮葺ないし板葺の建物ばかりであった、と断定することはできない。

瓦塚類のうち、掘立柱の掘形や抜取穴・溝・井戸など遺構に伴うものはごく僅かで、大部分 分布状況は調査地域の広範囲にわたる整地土層から出土したものである。馬寮域内の北半部は建物の数が多いが、先述の軒瓦の分布が示すのと同様、瓦塚類総体としてもまばらに分散して出土して

- * おり、建物の少ない南半部での分布状況と大差ない。南半部では中央の空閑地および佐伯門の東側から比較的多く出土した。調査地の西辺部は西面大垣に近接するが、ここでも瓦類の出土量は少ない。馬寮域外では、馬寮東官衙の西面を面する築地SA6150に伴う雨落溝SD6151・6152から多量に出土している。

54型式110種の出土軒瓦のうちほとんどのものについては『平城宮報告I～XI』および『基

- * 準資料瓦編I～IX』において報告済みであるので記述を簡略化し、新出型式・種については詳しく述べることにしたい。軒瓦個々の記述にあたっては、当研究所がいかにして型式・種別の認定をおこなっているかに意を注ぐこととし、弁数・珠紋数・鋸歯紋数などについては別表2・3にとりまとめ、特別なばあいを除いて本文中からは省いた。また、各種軒瓦の寸法、出土個体数、および相互の出土比率についても別表に示した。なお、本文中に図示した軒瓦拓本は
- * 馬寮地域から出土したものとは限らず、宮内各所から出土したもののうち最も残りの良いもので代表させ、縮尺は5分の1に統一してある。

1) 奈良国立文化財研究所『平城宮出土軒瓦型式一覧』1978、同『平城宮出土軒瓦型式一覧（補遺篇）』1983を合わせた数値である。1984年12

月現在さらに10数種を追加認定している。

2) 『平城宮報告IX』p.115。

3) 『平城宮報告VII』p.60。

A 型式分類

型式番号は4桁の数字とアルファベット1文字の組合せで表示するが、第1位の数字は時代を示す（6は奈良時代）。第2位以下の数字によって瓦の型式を示す（001～449は軒丸瓦、501～899は軒平瓦）。型式をさらにA以下のアルファベットで細分し種別を表わす（ただし、アルファベットは認定した順序に付しているので、年代順を示すものではない）。以上の分類のうち、軒丸瓦・軒平瓦は時代を問わずその紋様構成によって次の順序に従って配列する。

軒 丸 瓦	010～039	幾何学紋	370～399	単弁複弁混合紋	420～429	獸面紋
	040～199	単弁蓮華紋	400～409	宝相蓮華紋	430～439	禽獸紋
	200～369	複弁蓮華紋	410～419	横花紋	440～449	その他

幾何学紋軒丸瓦はさらに重圈紋（010～019）、輻状紋（020～029）、その他（030～039）に細別する。単弁蓮華紋はまず子葉の有無などによって子葉のないもの（040～099、素弁）、単に子葉を1個おいたもの（100～119、单子葉弁），子葉をさらに輪郭線によって区画したもの（120～129、重弁），菊花状のもの（130～149），間弁と弁とが重なり合うもの（150～159），四弁（160～179），忍冬弁（180～199）に分け、さらに外区の紋様によって細別する。複弁蓮華紋のばあいは、単弁とは逆に外区の紋様によってはじめに分類する。素紋縁（200～209）、鋸歯紋縁（210～229）、珠紋縁（230～259）、重圈紋縁（260～269）、珠紋+鋸歯紋縁（270～324）、雷紋縁（325～339）、平行線紋（340～344）、唐草紋縁（345～359）、雲紋縁（360～369）である。鋸歯紋縁はさらに面違い鋸歯紋・凸鋸歯紋・線鋸歯紋・複線鋸歯紋に分類でき、また、間弁の形態も分類の重要な要素になる。

軒 平 瓦

501～579 幾何学紋 580～799 唐草紋 800～809 雲紋 810～899 その他

幾何学紋軒平瓦はさらに重弧紋（550～559）、変形重弧紋（560～564）、剣菱紋（565～569）、重圈紋（570～579）に細別する。唐草紋も銀杏紋（580～589）、忍冬唐草紋（590～609）、忍冬唐草紋くずれ（610～619）、葡萄唐草紋（620～629）、单位紋（630～639）、偏行唐草紋（640～654）、偏行唐草の影響を受けた均整唐草紋（655～659）、均整唐草紋（660～799）に分ける。偏行および均整唐草紋については、さらに支葉・中心飾等の形状等によって細別する。

B 軒 丸 瓦 (PL. 48～53, Fig. 22～29)

軒丸瓦は310個体、28型式、55種出土した。これらは、まず瓦当の紋様によって、重圈紋軒丸瓦・単弁蓮華紋軒丸瓦・複弁蓮華紋軒丸瓦に3大別できる。

重圈紋軒丸瓦

1型式1種が出土した。

6018型式は4重圈紋で、A～Cの3種に細分される。Bが出土。圈線を内側から順に第1圈～第4圈と呼ぶと、Bは第1・第2圈の間隔が狭く、第2・3圈および第3・4圈の間隔が広い。圈線の幅は、第1・2圈が細く、第3・4圈が太い。Aは瓦当中央に珠点をもつがCにはなく、Bは瓦当中央に目釘穴があるため珠点の有無は不明である。

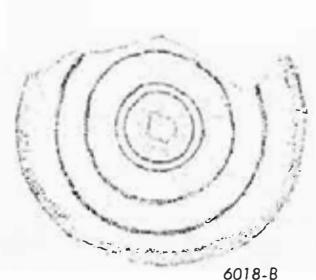


Fig. 22 重圈紋軒丸瓦

ii 単弁蓮華紋軒丸瓦

4型式8種が出土した。これらはいずれも外区内縁に珠紋帯をめぐらせるが、外縁の紋様に違いがあり、線鋸歯紋縁のもの、凸鋸歯紋縁のもの、素紋縁のものに3分できる。

線鋸歯紋縁 6130型式は弁が短かめで弁端が丸味を帶び、間弁がこれを開むようにのびる。

- * 中房が弁区よりも突出する。A・Bの2種がありBが出土。BはAより小型で、間弁が弁を完全に開み重弁風になる。蓮子の中央の1顆が大きい。6134型式は6130と似るが中房がへこみ、間弁が弁を開むようにはのびない点で異なる。A・Bの2種がありAが出土。Aは弁が細く弁端が丸く、間弁がY字状をなす。

凸鋸歯紋縁 6131型式は中房が弁区より一段突出し、瓦当面径が小さい。弁は細長く弁端が

- * 丸味を帶びる。外区内縁・外縁間に界線がない。A・Bの2種がありAが出土。Aには間弁がありBにはない。

素紋縁 6133型式は間弁がなく弁とおしが接するのが特徴。蓮子数・弁数・珠紋数の差を基

準にA～D、I～Pの12種に区分でき、A・B・Da・Db・M・Pが出土。Aは弁が短かく弁端が尖り気味。中房と弁区の高さが等しい。BはAに似るが、蓮子数・珠紋数が異なり、弁が

- * やや細い。A・Bは外区内・外縁の境に界線がめぐる。Dは弁端が丸く、外区の界線がない。
Da・Dbの2者があり共に出土。Daは中房と弁区の高さが同じであるのに対し、Dbは中房が突出する。MはA・Bに似て弁端が尖るが、中房が突出し外区の界線がない。PはDに似るが蓮子数が異なる。蓮子に対応する4弁は弁端が尖り弱く反り上るが、他の弁の弁端は丸い。

外区内・外縁間の界線がない。

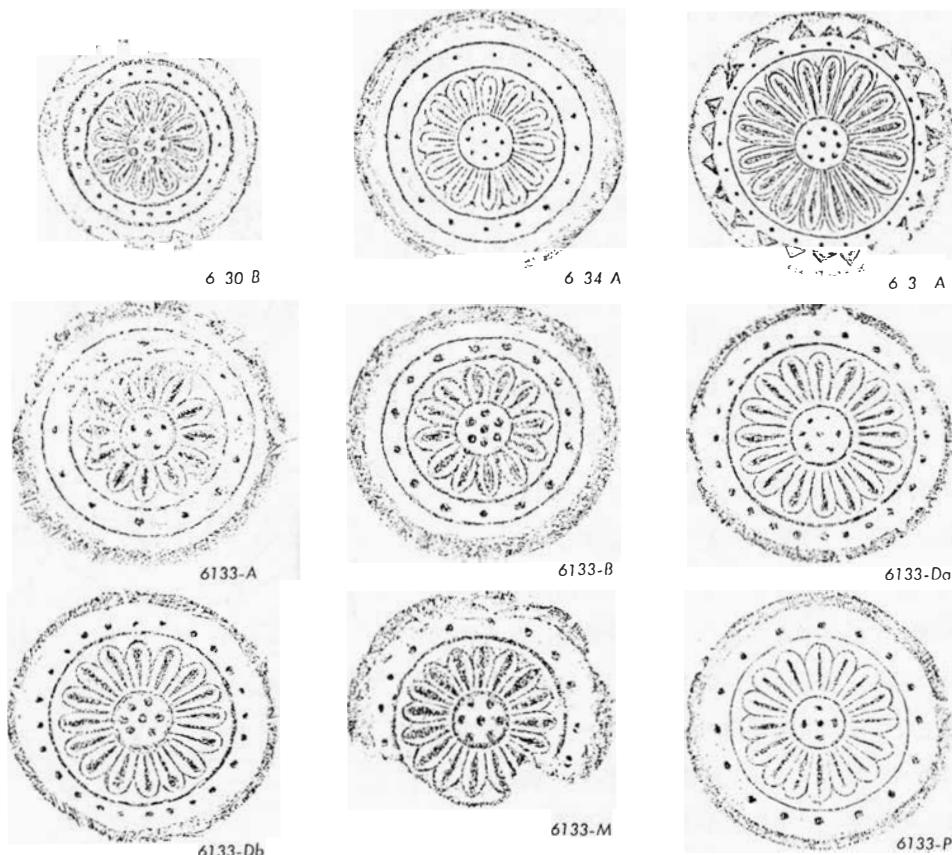


Fig. 23 単弁蓮華紋軒丸瓦

iii 複弁蓮華紋軒丸瓦

複弁蓮華紋軒丸瓦は23型式46種出土した。これらは外区内・外縁の紋様を基準に、二重圈線+凸鋸歯紋縁、珠紋縁、珠紋+素紋縁、珠紋+凸鋸歯紋縁および珠紋+線鋸歯紋縁に区分できる。

二重圈線+凸鋸歯紋縁 6225型式はまず第一に中房の径が大きいことを特徴とする。複弁の形状は単弁2つを接合したような形をなし、照りむくりが小さい。中房は外区内縁と同一平面上にある。A～E, Lの6種があり、Dを除いた5種が出土した。Aは弁端が尖る。子葉は短かめで高く突出し、細長い杏仁形を呈する。蓮弁はやや盛り上り、弁端が外方へ垂れ下る。蓮弁中央部にある2つの子葉の輪郭線が合する部分が中央寄りに深く入り込むため、単弁2つを合わせたような複弁の形状の特徴が明瞭である。また、これに対応して、間弁は人字形に大きく枝分れする。蓮子と凸鋸歯紋が大振りで、内・外区の界線が太い。BはAに酷似するがやや大型で、弁・間弁が共に長い。また、蓮子が極めて大きい。Cは弁端が丸い。子葉の突出度がAより小さく、細長い無花果形を呈する。蓮弁がやや盛り上り、弁端が外方へ垂れ下る点はAと同じであるが、2つの子葉の輪郭線が合する部分がAほど深くは中房寄りに入り込まないため、蓮弁全体の形状はAに比してより複弁らしい。これに対応して間弁端部の枝分れが小さい。蓮子と凸鋸歯紋は小振り。Lは超大型で、紋様の特徴はCに似る。Eは新種である。從

**6227 C を
6225 E に
変更** 来二重圈線+素紋縁の6227Cと認定していたが、外区外縁に凸鋸歯紋のあることが判明したため変更した。弁は

線的に表現し、平板で盛り上りを欠き弁端がやや反り上るので、他種とは若干趣を異にする。子葉は短かめで、蓮子は小振り。間弁細くY字状をなす。瓦当は厚手で、瓦当裏面をヘラでえぐりこむ。瓦当側面は横方向にヘラケズリする。丸瓦の瓦当への接合位置は瓦当裏面の中央に近く、多量の接合粘土を用いるため接合線は浅い円弧を描く。丸瓦部凸面は縦方向のナデ、凹面は縦方向のヘラケズリで仕上げる。瓦当面全面に布目痕を残すものがある。同範品が大和薬師寺にある。

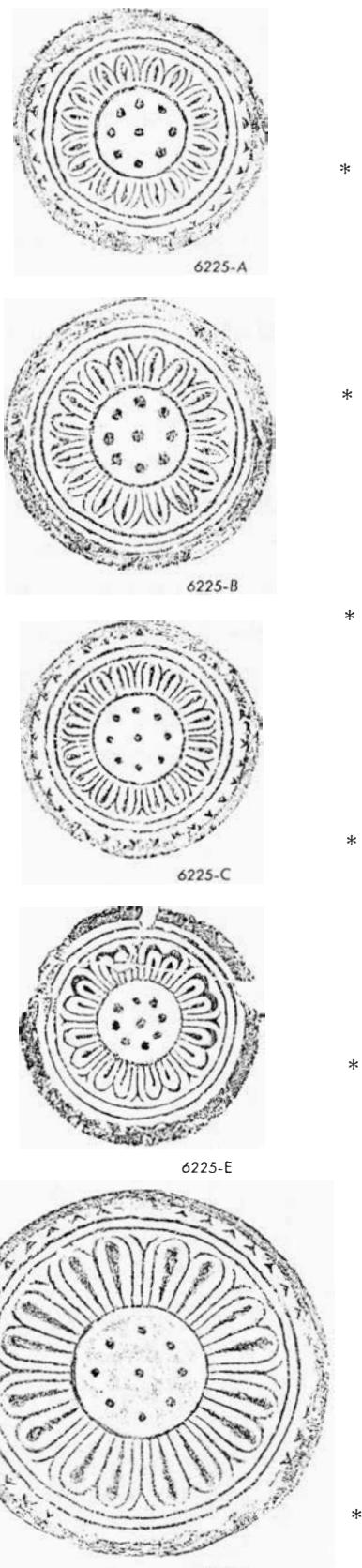
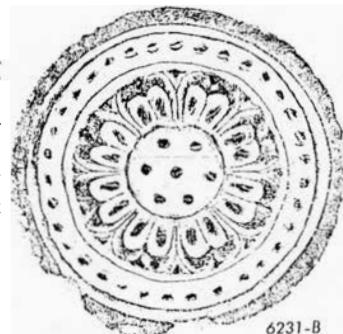
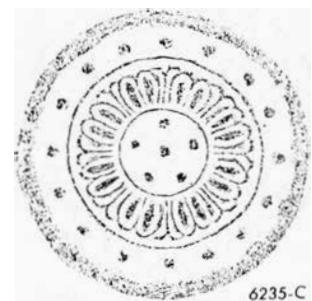


Fig. 24 複弁蓮華紋軒丸瓦(1)

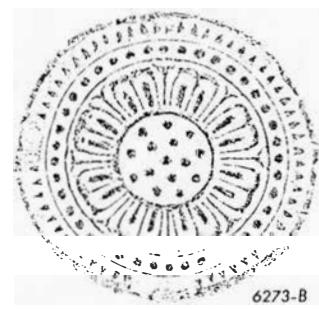
珠紋縁 6231型式はいわゆる大官大寺式の軒丸瓦である。極めて大型、中房が大きく高く突出する。弁の輪廓線が幅広で、弁端が強く反り上る。外区は斜縁で、ここに珠紋が密にめぐる。珠紋帯の内・外に細い界線をめぐらす。外区外縁上面に段をつける。A～Cの3種があり、Bが出土。Bは中房径・弁区径・弁幅・珠紋数が3種の中で最小。



珠紋+素紋縁 6235型式はいわゆる東大寺式軒丸瓦である。中房は大きく弁区より低い。概して弁の照りむくりが強い。間弁はT字状で、枝分れした先端が弁に接する。外区に大振りの珠紋を疎らにめぐらす。A～IIの8種がありCが出土。Cは弁に照りむくりがなく平板で、中房と弁区の高さが等しい。子葉が長く、弁の輪廓線と間弁とを線的に表現する。外区の内・外縁を画す界線はなく、外縁は直立縁。



珠紋凸鋸歯紋縁 6273型式は藤原宮式軒丸瓦の一つである。A～Dの4種があり、共に蓮子の配置が1+5+8、弁数が8、外区の珠紋数が40。このうちBが出土した。Bは中房が突出する。弁には照りむくりがなく弁端のみが強く反り上る。珠紋は4種中最も大きいが低い。



珠紋+線鋸歯紋縁 外区に珠紋帯と線鋸歯紋縁を持つ仲間は非常に多い。弁と間弁との関係に注目し、間弁が独立するものをA系統、間弁が界線状に弁をめぐらすものをB系統、間弁のないものをC系統としてさらに細別することが可能である。

間弁の分類

Fig. 25 複弁蓮華紋軒丸瓦(2)

イ) 間弁A系統

6274型式は藤原宮式軒丸瓦の1種である。中房が突出し、弁が大きい。弁には照りむくりがあり、弁端が強く反り上る。A・Bの2種があり、Abが出土。Aは弁区が盛り上り弁の照りむくりが大きい。外区内・外縁間の囲線が2重。外区外縁上面に凸線をめぐらす。Aはさらに瓦当範の彫り直しの状況からAa～Acに区別できる。Aaは蓮子の周囲に円圈をめぐらし、外区内・外縁間の界線が2重。Abは範の磨耗が進行し、蓮子の周囲の円圈が消滅した段階で蓮子を小さく高く彫り直し、外区の界線を2本まとめて1本としたもの。

* 6275型式も藤原宮式軒丸瓦である。中房が高く突出する。弁は小さく平板で、弁端がわずかに反り上る。外区の珠紋は密だが、線鋸歯紋は粗い。A～E、G～Iの8種がありA・C・Dが出土。Aは蓮子の配置が1+4+12で、これはAのみ。Cの蓮子は1+8+15でこれはCのみ。

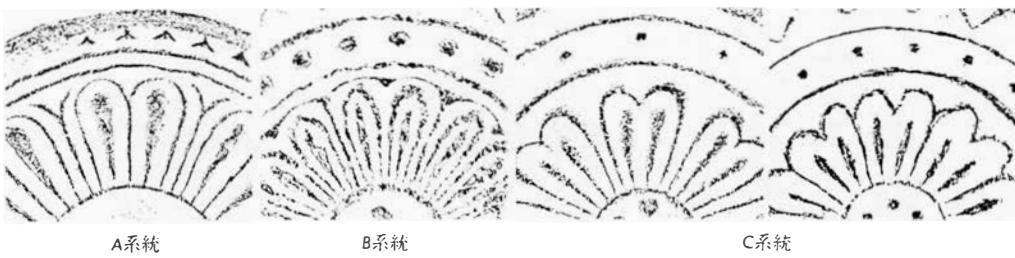


Fig. 26 弁と間弁の関係

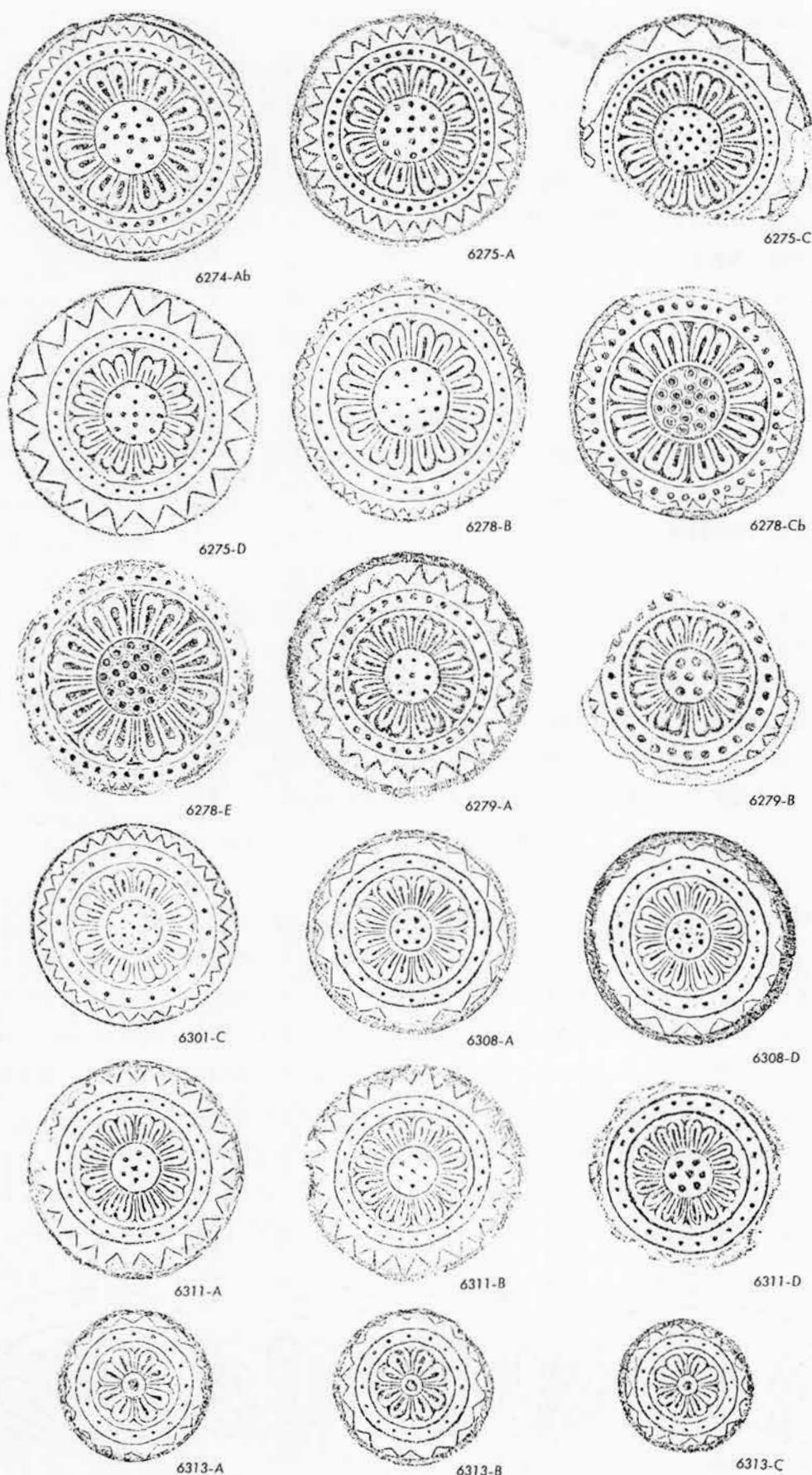


Fig. 27 複弁蓮華紋軒丸瓦(3) 間弁A系統

珠紋が小さい。外区外縁が幅広く、線鋸歯紋が特に粗い。Dは蓮子の配置が1+4+8で、中房はあまり突出しない。弁・間弁ともに端部が反り上らず、外側へ向う幅広の緩斜面となる。C同様に外区外縁が幅広く線鋸歯紋が粗いが、Cに比して外区外縁の傾斜がゆるい。

6278型式も藤原宮式である。瓦当面全体が扁平。弁は線的な表現で細長い。間弁の先端が2

- * 又に分れない。外区外縁の幅が狭く低い。A～Fの6種があり、B・Cb・Eが出土。Bは中房が比較的高い。弁は全く反り上らず、端部が外方へ向う幅狭の傾斜面となる。子葉をかこむ輪廓線の合する部分が2又に大きく分れる。Cは瓦当面全体が凹レンズ状にくぼむ。中房は弁区と同じ高さで、凹線によって弁区と画す。蓮子に円圏をめぐらせる。弁・間弁は太目の凸線で表現し彫りが深い。外区の内・外縁を画す界線がない。Ca・Cbの2者があり、CbはCa
- * の蓮子・珠紋・弁の一部を彫り直したものである。Eは中房が突出し、蓮子に円圏をめぐらす。弁は長大で弁端・子葉端が反り上る。外区の界線はない。

6279型式も藤原宮式である。中房が小さく、蓮子は中央の1点のまわりに1重にめぐる。これ

は藤原宮式軒丸瓦では唯一の例であり、その点以外は6275によく似る。A・Bの2種があり共に出土。

Aは蓮子を方形に配置する。弁端が反り上るがBほどではない。外区外縁が幅広

- * く、線鋸歯紋が粗い。Bは蓮子を六角形に配置する。子葉が短く弁端が強く反り上る。蓮子・外区の珠紋が大きい。外区外縁の幅が狭い。

6301型式はいわゆる興福寺式の軒丸瓦である。中房が大きく蓮子を2重にめぐらす点で藤原宮式の6274・6275・6276・6278と同じ。ただし、面径が小さく珠紋・鋸歯紋が粗い点が異なる。

弁には照りむくりがある。A～Cの3種がありCが出土。Cは面径が最小で、蓮子数・珠紋数

- * はAと等しいが、線鋸歯紋が細かい。子葉をかこむ輪郭線と間弁は鋭い稜をもち、弁端はA・Bより強く反り上る。A・Bは外区外縁上面に凹線をめぐらすが、Cにはない。瓦当は薄い。

6308型式は6279の系譜を引き、中房が小さく蓮子を1重にめぐらす。中房は外区内縁と同高

ないしやや高い位置にあり、弁区よりわずかに突出する。A～D・F・H・L・Nの9種があ

り、A・Dが出土。なお旧GはDと同範と判明したので消去した。Aは弁の根元がしまり末広

- * がりとなり、弁端わずかに反り上る。8弁のうち3弁については間弁がB系統状を呈し、弁の周囲をとりまく。範割れ痕のあるものが多く、割れ目に粘土が入りこんでできた突線が中房端を走る。外区外縁上面に凸線がめぐる。DはAによく似るが、中房がやや大きく、より高く突出する。弁は根元がしまるがAより短かい。珠紋数がA・Bより多い。A・Bとともに珠紋と鋸歯紋の割り付けが整っているのに対し、Dでは乱れる。

- * 6311型式は6308によく似るが、中房の高さが外区内縁と同じないしやや低く、くぼみ加減な点で区別できる。A～Dの4種があり、A・B・Dが出土。A・Bは酷似し、ともに中房が深くくぼみ、珠紋・線鋸歯紋が密。両者の差は、弁端がAでは高く反り上りBでは垂れ下る点に認められる。Dは中房がA・Bほどくぼまず、弁幅が狭い。弁端が垂れ下る点はBに似るが、照りむくりは小さい。

- * 6313型式は複弁4葉、面径11cmほどの小型瓦である。A～Dの4種があり、A～Cは間弁がA系統であるが、DのみB系統に属す。蓮子が1個できわめて大きい点が共通した特徴をなす。A・B・Cが出土した。Aは瓦当径が最大で、内区全体が盛り上る。Bは瓦当径がAに近いが、内区がAに比して平板。Cは瓦当径が最小で、内区はBに似て平板。

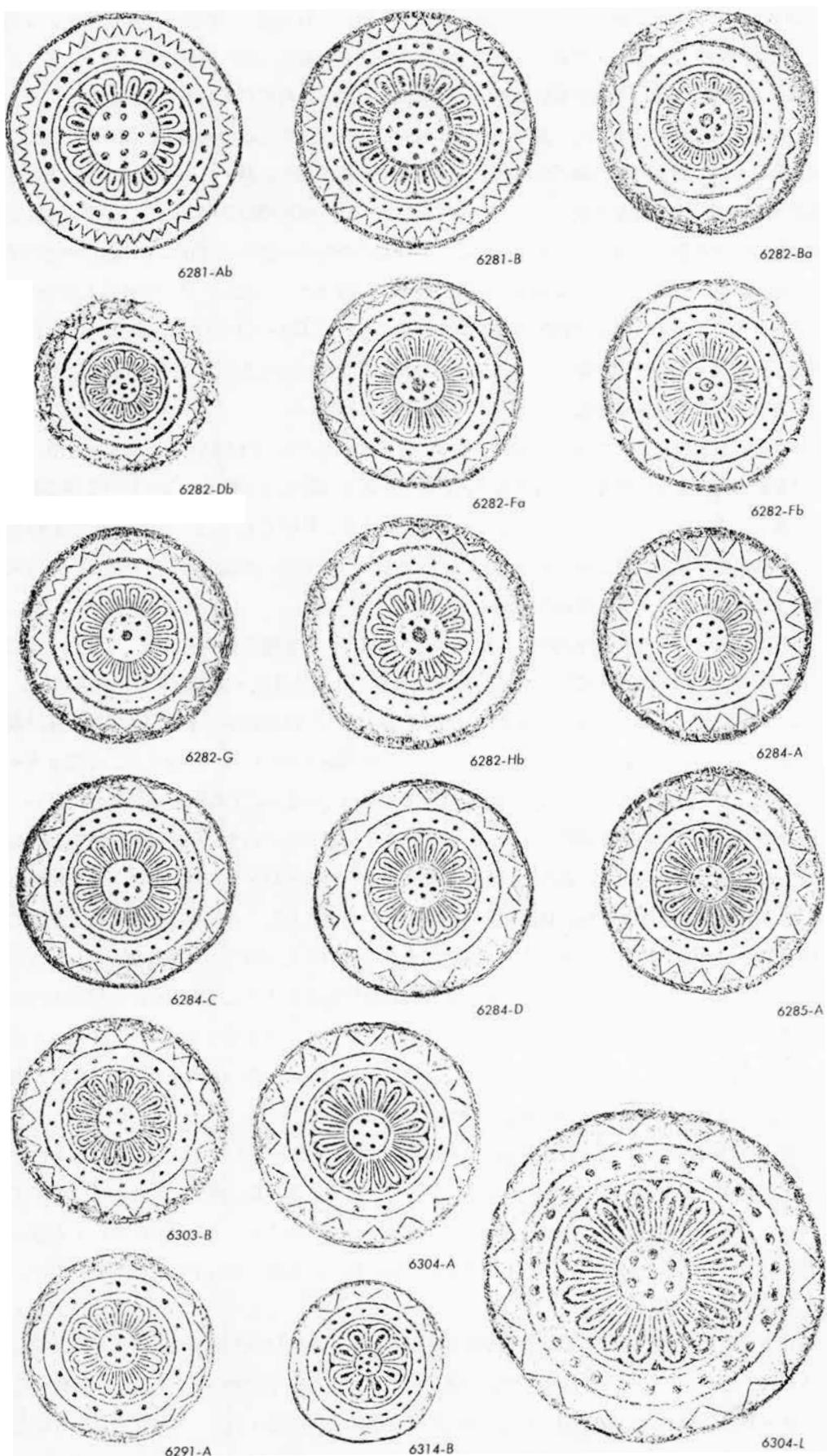


Fig. 28 複弁蓮華紋軒丸瓦(4) 間弁B系統

口) 間弁B系統

- 6281型式は藤原宮式の軒丸瓦である。中房が大きく蓮子を2重にめぐらすが、これはB系統中で唯一の例をなす。弁は凸線で表現し、子葉をかこむ輪廓線どうしが離れる。珠紋・鋸歯紋は共に密。A～Cの3種があり、Ab・Bが出土。Aは中房が弁区と等高。弁は短かく、子葉
- * をとりまく輪廓線をBに比してより線的に表現する。蓮子と珠紋が高く突出する。線鋸歯紋がBより細かい。弁の彫り直しの進行状況からAa・Ab・Acの3段階に区別できる。Bは中房が突出し、弁が長い。蓮子・珠紋はBより低く頭が丸い。
- 6282型式は6281の系譜を引くが、中房が小さくなり、それに付随するように蓮子は1重である。弁は線的に表現し照りむくりがない。外区の珠紋・線鋸歯紋の数が少なくなる。A・B、
- * D～Lの9種がある。A・Fを除く7種は瓦当面が凸レンズ状に盛り上り、外区内・外縁間の界線が内区・外区間の界線より太い。また、Aを除く8種は中房の中心の蓮子が大きい。本調査区ではBa・Db・Fa・Fb・G・Hbが出土した。Bは瓦当面の盛り上りが比較的小さく中房が平坦。蓮弁は短かく、子葉を囲む輪廓線どうしが離れる。Ba・Bbがあり、Bbは中房と弁区との境に界線がなくなり、弁を一部彫り直す。Dは小型で、弁の子葉をかこむ輪廓線どう
- * しが接する。Da・Db・Dcがある。DbはDaの中房の中心蓮子をひとまわり大きくし、弁を一部彫り直す。Fは中房が弁区よりわずかに突出する。弁は長めでわずかに照りむくりがある。子葉をかこむ輪廓線どうしが離れる。Fa・Fbがある。Fbは弁の一部を彫り直し、子葉が細くなる。外区外縁の線鋸歯紋が太くなる。また、範の磨耗後に弁と中房・弁区間の界線を深く彫り直したため、Faに比して中房が低くなる。Gは瓦当面の盛り上りが大きい。中房は
- * 弁区より一段低いが、凸レンズ状に中高となる。弁はBとFの中間位の長さで、子葉をかこむ輪廓線どうしが離れる。Hは瓦当面の盛り上りが大きいけれど中房は平坦。弁は長めで、子葉をかこむ輪廓線どうしが離れる。弁をかこむ輪廓線が太く、高く突出する。8弁のうち1弁は紋様が崩れ、子葉がなく、子葉をかこむべき輪廓線の一部が欠ける。Ha・Hbがあり、Hbは弁および間弁を全体的に彫り直す。
- * 6284型式は6282に似るが、中房が小さく弁が長い。中房中心の蓮子は6282型式のように大きくなない。A、C～Fの5種がある。A・D・Fは弁が盛り上り、中房も中高に盛り上る。C・Eは中房・弁が平板で、中房が弁区より一段突出する。A・C・Dの3種が出土。Aは中房が外区内縁より高い位置にある。蓮子相互の間隔が均整でなく、全体に片寄る。弁端が外方へ垂れ下がる。外区の線鋸歯紋が細かい。DはAに酷似するが、中房の高さが外区内縁とほぼ等しく、凸レンズ状に中高な点で異なる。蓮子は中房の中央に集まる。弁端はAと異なりやや反り上る。Cの特徴は上述の通り。

6285型式は6284よりさらに中房が小さく、弁が長い。中房は外区内縁よりかなり高く、蓮弁が盛り上る。子葉は幅広で、端部が外方に垂れ下がる。蓮子・珠紋ともに小さい。A・Bの2種がありAが出土。Aは弁の盛り上りがBより大きく、中房も凸レンズ状に低く盛り上る。

- * 6303型式は大阪府船橋遺跡・後期難波宮出土の軒丸瓦と同範の6303Aを標識とする。6303Aの特徴は、内区全体がきわめて強く盛り上り、中房が弁区より一段高く突出し凸レンズ状に中

1) 大阪府教育委員会『河内船橋遺跡出土遺物の研究』(大阪府文化財調査報告書8) 1958,

p.37。難波宮址顕彰会・研究会『難波宮址の研究6』 1970, p.108。

高な点にある。ただし、6303Bは6303Aよりむしろ6284A・D・Fに近似する。弁は盛り上るが6303Aほど強くはない。中房は外区内縁上りやや高く6284Aに近い。中房がほぼ平坦な点は6284Cに近い。弁端が反り上る点は6284Dに似る。

6304型式は中房が弁区よりかなり高く突出する点で6284・6285・6303とは大きく異なる。A

**6304 Fは
6304 Dと同
範のため消
去**

～E, Lの6種があり、旧FはDと同範であることが判明したため消去した。中房が外区内縁 * よりやや高いものが多く、同じ高さのものが少数ある。弁は長めで盛り上るが、弁端が尖り気味な点でも6285と異なる。A・Lが出土。Aは弁が特に長く、子葉をかこむ輪廓線が太い。弁の盛り上りが6304の中では大きく、弁端が垂れる。Lは超大型品。中房は外区内縁とほぼ同じ高さにあり、上面が凸レンズ状に低く盛り上る。弁の盛り上りがかなり大きく、弁端が低く垂れ下る。

6291型式は、間弁がB系統であるが、弁の形態は間弁A系統の6308・6311型式と類似する。

A・Bの2種がありAが出土。Aは中房高が外区内縁よりかなり高く、弁区からも一段高く突出する。外区外縁の断面は蒲鉾形で、その上面に凸線をめぐらす。

6314型式は複弁4葉の小型瓦。間弁がB系統であるため6313Dに似るが、蓮子が1個ではなく、中心の1顆の周囲に5ないし6個をめぐらす。A～Eの5種がありBが出土。Bは中房が * 低く突出し、外区内縁よりやや高い。蓮弁は平板。子葉が幅広で、弁端が丸味を帯びる。

ハ) 間弁C系統

6296型式は単弁と区別しにくいが、従来から複弁としてきたものである。子葉が幅広で長く、弁どうしが接する。弁の形状は6133と酷似する。A・Bの2種がありAが出土。Aは中房がくぼむ。弁端が尖り気味で、子葉をかこむ輪廓線が内区・外区間の界線に接する。

新種6307I

6307型式も間弁がない。A～I, Lの10種がある。複弁の形状には弁中央に凸線のないものと、弁中央に凸線があり、単弁2つを接合したような形のものとの2者がある。また弁と弁との関係においては、すべての弁どうしが離れるもの、すべての弁どうしが接するもの、弁が接する箇所と離れる箇所があるものの3者がある。本調査区からはB・Iが出土。Bは単弁を2つ合わせたような複弁で、弁どうしが接する。中房はくぼみ、外区内縁とほぼ同じ高さ。Iは新種。単弁を2つ合わせた類の複弁で、弁どうしは離れる。中房はくぼみ、外区内縁より若干高い位置にある。丸瓦の瓦当への接合位置はやや低く、多量の接合粘土を用いる。丸瓦部凸面は縦方向にヘラケズリする。

新種6316K

6316型式は弁の形状に特徴があり、弁の中央に凸線がなく、子葉2本を輪廓線で囲む形をとる。A～Kの11種がありKが出土。Kは新種。中房がくぼみ、外区内縁よりやや高い位置にある。中房径は大きい。弁にはわずかながら照りむくりがある。瓦当はぶ厚く、瓦当裏面は平坦。丸瓦の瓦当への接合位置は低く、多量の接合粘土を用いる。

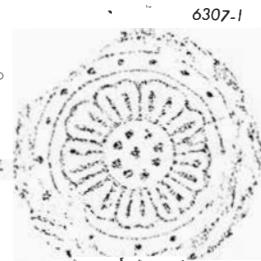
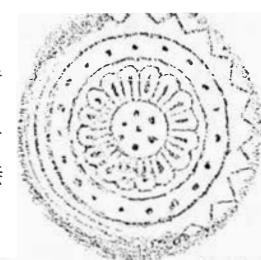
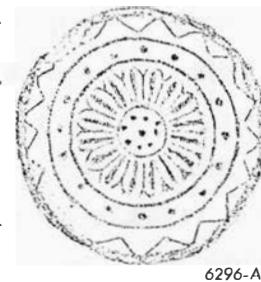


Fig. 29 複弁蓮華紋軒丸瓦(5) 間弁C系統

C 軒 平 瓦 (PL54~58, Fig. 30~43)

軒平瓦は563点、26型式、55種出土した。これらを瓦当の紋様によって大別すると、重圏紋軒平瓦・偏行唐草紋軒平瓦・均整唐草紋軒平瓦に分けられる。

重圏紋軒平瓦

- * 重圏紋軒平瓦は1型式1種のみ出土した。
6575型式は3重圏紋で、A・Bの2種に細分される。
Aが出土。Aは圏線の断面が方形で角張る。圏線間の溝部分の底面は平坦。頸は深い曲線頸。



Fig. 30 重圏紋軒平瓦

II 偏行唐草紋軒平瓦

- * 偏行唐草紋軒平瓦は4型式15種出土した。これらは唐草の形状を基準に、支葉2個からなる唐草紋と変形忍冬唐草紋とに区分できる。

支葉2個からなる唐草紋

この類はさらに外区紋様を

基準にして、上外区珠紋・下外区線鋸齒紋のもの、上外

- * 区・下外区とも珠紋のものに2分できる。

イ) 上外区珠紋下外区線鋸齒紋

6641型式は唐草が左から右へ展開する右偏行唐草紋で

ある。頸は段頸。A・C・E・F～I・L・N・Oの10

種があり、Ab・C・E・F・Oが出土した。Aは茎の

- * 起点と末端を反転させ、それぞれに1支葉を付す。支葉にはa類・b類がある(Fig. 32)。下外区・脇区の線鋸齒紋が連続する。Aa・Abがあり、Abは脇区・下外区の線鋸齒紋を削り落す。Cは茎の起点が反転せず、遊離した2支葉を置く。茎の末端は反転するが、支葉は付さ

- * ない。支葉にはa～c類のすべてが含まれる。下外区・

脇区の線鋸齒紋が連続しない。Eは茎の起点が反転し、遊離した1支葉を置く。茎の末端は反

転せず、逆方向の支葉を上下各2個配す。支葉はa・b・c類がある。FはEに似るが、茎の末

端が反転し1支葉が付く。支葉はa・b・c類。下外区・脇区の線鋸齒紋が連続する。Oは新

種。小片のため紋様構成の一部しか判明しないが、支葉がC類で逆方向の小支葉を加える点は

- * G・Hに近い。しかし支葉が大振りで巻きが弱く、内区幅が広い点は異なる。

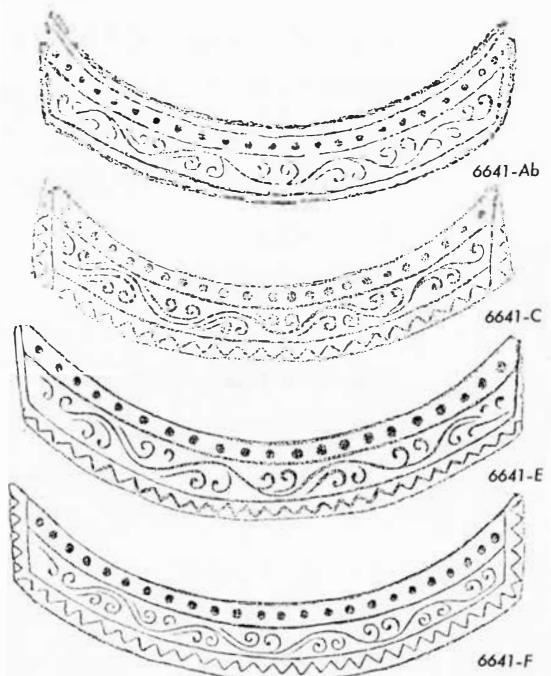


Fig. 31 偏行唐草紋軒平瓦(1)



Fig. 32 偏行唐草紋支葉の分類

口) 上外区下外区ともに珠紋

6642型式は右偏行唐草紋軒平瓦である。頸は段頸。A～Cの3種がある。3種ともに茎の起点・末端が反転し、支葉はb種に限られるなど、種間の差異は小さい。3種共に出土し、Cは新種。Aは左から4単位目・5単位目の唐草の右側支葉が大振り。6単位目の唐草の左側支葉が小さい。4単位目の唐草の支葉と支葉の中間に上外区の珠紋がくる。Bは上外区の左から7番目と8番目の珠紋との間隔が広い。4単位目・5単位目の唐草の右側支葉が小振りで、5単位目の唐草の左側支葉が大きい。Cは唐草の巻きこみが全体的に強く、唐草の線が太い。4単位目の唐草の支葉、5・6単位目の唐草の左側支葉が大きい。

6643型式は左偏行で、頸は段頸。A～Dの4種があり、共に茎の起点・末端が反転する。Aa・B・Cが出土。Aは唐草が小振りで、支葉はすべてc類。下外区と脇区を画す界線があり、これはAのみの特徴。Aa・Abがあり、Abは唐草各単位の左側支葉が茎に接する。Bは支葉がすべてb類。外区の珠紋数が少なく間隔が不揃い。Cは6643中で支葉が最も大きく、支葉はb類・c類を併用する。

変形忍冬唐草紋 外区紋様は上外区珠紋+下外区線鋸歯紋のもののみで、上外区・下外区共に珠紋のものはない。

6647型式は左偏行の唐草紋である。頸は段頸。A～Gの7種がありA・C・D・Gが出土。Aは渦巻形萼と蕾の形状が忍冬紋の原型に近いが、花弁は不規則な曲線であらわす。CはFと共に6647中では渦巻形萼・蕾・花弁すべてが原型をよく残し、忍冬紋の祖型に近い。下外区の線鋸歯紋は上下の界線から離れる。Dは単位紋様がかなり崩れている。右から2単位目・4単位目の唐草の先端が水滴形である点が特徴的。上外区の珠紋・下外区の線鋸歯紋が共に細かい。Gは単位紋様が崩れ、唐草各単位の先端部をひしやげた扇形につくる点が特徴。瓦当が最も薄く、珠紋・鋸歯紋が最も細かい。

iii 均整唐草紋軒平瓦

均整唐草紋軒平瓦は21型式39種出土した。これらは中心飾の形状を基準に15の類型に区分できる。

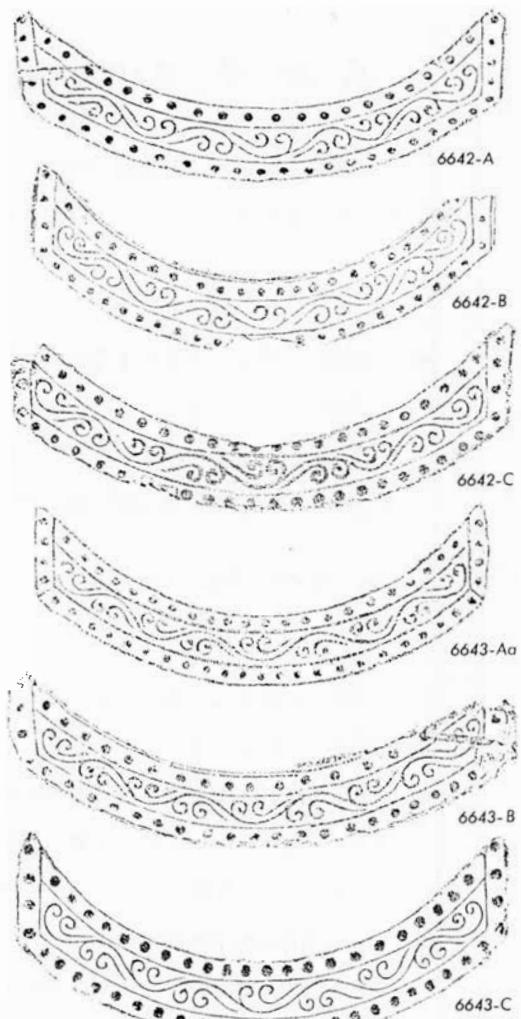


Fig. 33 偏行唐草紋軒平瓦(2)

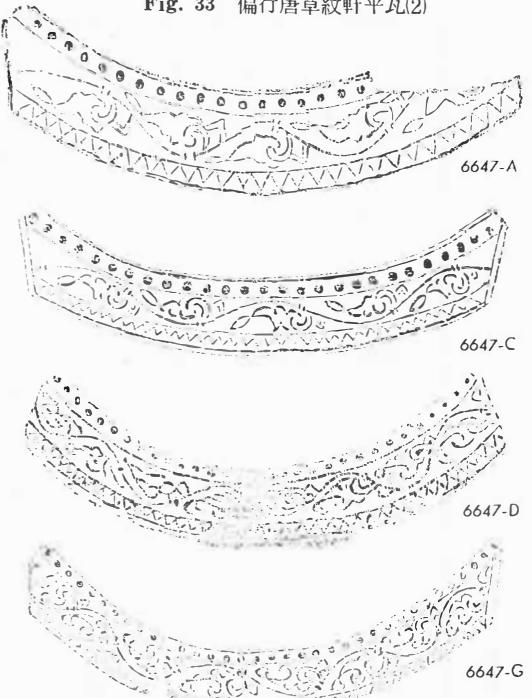


Fig. 34 偏行唐草紋軒平瓦(3)

花頭形 花頭形の中心飾を下から上へ巻きこむ唐草で囲んだもの。これらは外区の紋様を基準に、上外区珠紋+下外区線鋸歯紋のもの、2重圓線のもの、上外区・下外区とともに珠紋のものにさらに細別できる。

イ) 上外区珠紋下外区線鋸歯紋

- * 6661型式はいわゆる大官大寺式の軒平瓦である。中心飾は楽譜の四分休符を2つ対称に合したような形である。上外区の珠紋は杏仁形。唐草紋は3回反転。頸は段頸。A～Cの3種がありCが出土。Cは上外区の珠紋が細長い。唐草の巻きが弱く、唐草第1単位第1支葉の基部が曲折せず滑らかにカーブする。中心飾の花頭形は伸びを欠く。

ロ) 外区が2重圓線のもの

- 6663型式は花頭形の基部を平行線で表現し、基部が内圓線に接する。唐草は3回反転。A～F, H・Iの8種がある。B・Fの一部が段頸で、その他は曲線頸。A・B・C・Fが出土。Aは唐草の主葉・支葉の元が内圓線に接し、そこから流れ出るように派生する。唐草第3単位の主葉・第1支葉の先端が脇区圓線に接する。Bは唐草の形状がAに酷似するが、内区幅がAより狭いため唐草はAより扁平になる。唐草第3単位の近くに珠紋を置く。本調査区では段頸のものが多く73%を占める。Cは唐草の基部が圓線に接しない。唐草第3単位主葉の先端が脇区圓線に接するが、右第3単位第1支葉を欠く。左第2単位第1支葉の巻きこみが通常と逆。Fは唐草の基部が圓線に接し、唐草はそこから立ち上るように派生する。第3単位主葉・第1支葉の先端が脇圓線に接さずに巻きこむ。今回出土のものはすべて曲線頸。

ハ) 上外区下外区共に珠紋のもの

- 6664型式は唐草が3回反転で、唐草の基部が内・外区を画す界線から流れ出るように派生する。唐草第3単位主葉が脇区界線にとりつき、第1支葉は先端を巻きこむ。頸は段頸。A～D, F～Oの14種があり、C・D・F・Ga・H・Iが出土。Cは中心飾の花頭基部が細く上端が開き、界線には接しない。外区珠紋が大きい。内区幅が狭く、唐草各単位が横長。紋様の彫りは線が浅く細い。外区と脇区の境に凸線を置く。Dは中心飾の花頭基部を平行線で表現し、基部上端が界線に接する。唐草主葉の巻きこみが小さい。紋様の彫りは深く線が太い。外区と脇

1) 均整唐草紋の単位分割法と各単位の部分名称
は『奈良國立文化財研究所基準資料 I』瓦編1
解説 p.13 による。唐草紋の各単位は中心部から順に第1単位・第2単位・第3単位のように

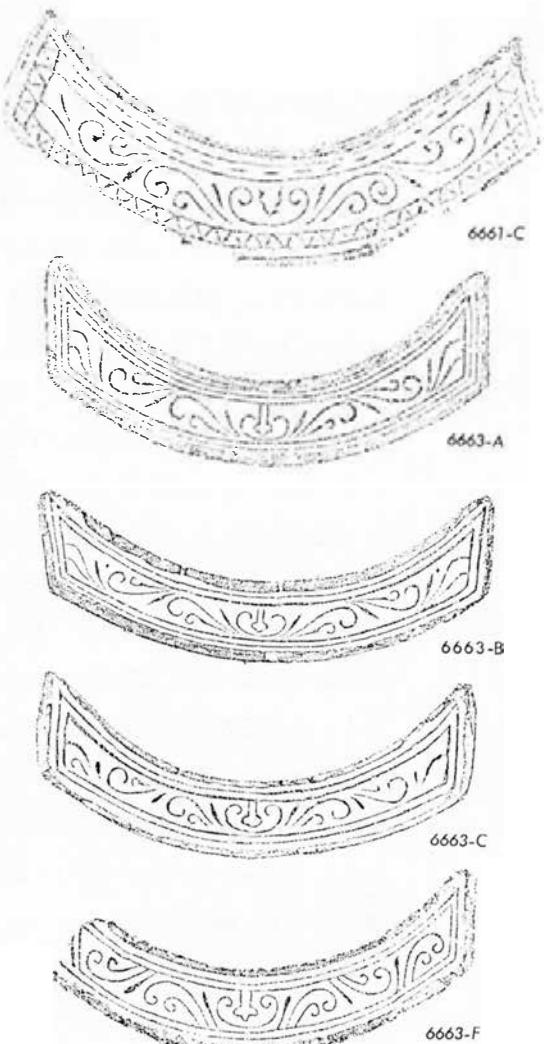


Fig. 35 均整唐草紋軒平瓦(1)

呼ぶ。唐草の1単位内の部分名称は、中央に流れるものを主葉、他は支葉とし、支葉のうち主葉が巻きこむ側にあるものを第1支葉、反対側のものを第2支葉とする。

区の境の凸線は杏仁形珠紋状を呈する。FはDに酷似するが、中心飾がDに比して多少扁平。また、花頭基部の真上の珠紋が、Dでは花頭基部の中心線に対してやや左に寄るのに対し、Fではやや右に位置する。唐草第3単位主葉と右脇区珠紋の位置関係が明瞭に異なる。珠紋はFの方が密。Gは中心飾の花頭の先端が横に大きく広がる。花頭基部は上方でやや開くが直線的で、界線に接しない。唐草の主葉の巻きこみは小さい。唐草左第1単位が他に比して長い。外区と脇区の境に杏仁形珠紋を置く。Ga・Gbがあり、Gbは唐草を太くする。Hは中心飾の花頭基部が直線的で界線に接しない。花頭の先端は小さい。唐草第1単位主葉の巻きこみが小さく、唐草第2単位主葉の巻き込みが大きい。外区と脇区の境に杏仁形珠紋を置く。外区珠紋が密。Iは中心飾の花頭基部が大きく開き、界線に接さない。唐草の巻きこみが6664中最も強く、特に第1単位が強い。外区と脇区の境に杏仁形珠紋を置く。外区珠紋は密にめぐる。

6666型式も3回反転唐草紋であるが、唐草の基部が内・外区間の界線から立ち上るように派生する点で6664と異なる。唐草第3単位主葉が脇区界線にとりつき、第1支葉は巻きこむ。顎は段顎。A種のみがある。中心飾は6664D・Fと同じく、花頭基部を平行線であらわし、界線に接する。唐草各単位は長さが短かく、巻きこみが小さい。外区の珠紋が小さい。

菱形珠点 中心飾が菱形の珠紋で、これを上から下へ巻きこむ唐草によって囲む形のもの。

6671型式は唐草が3回反転で、第3単位が脇区界線にとりつかない。上外区と脇区に杏仁形珠紋、下外区に線鋸歯紋を配する。外区は内区より一段高い。A～Dの4種がありCが出土。Cの唐草は主葉・第1支葉・第2支葉からなり(B・Dと共に)、唐草の巻きこみが6671中もっとも強い。内区両端に遊離した小支葉を配す。顎は直線顎に近い曲線顎。

逆十字形 逆十字形の中心飾を下から上へ巻きこむ唐草で囲む形のもの。これには、外区紋様が二重圈線のものと、珠紋のものとがある。

イ) 二重圈線

6681型式は唐草が3回反転で、唐草第3単位主葉が脇区界線に接する。A～E、Sの6種が

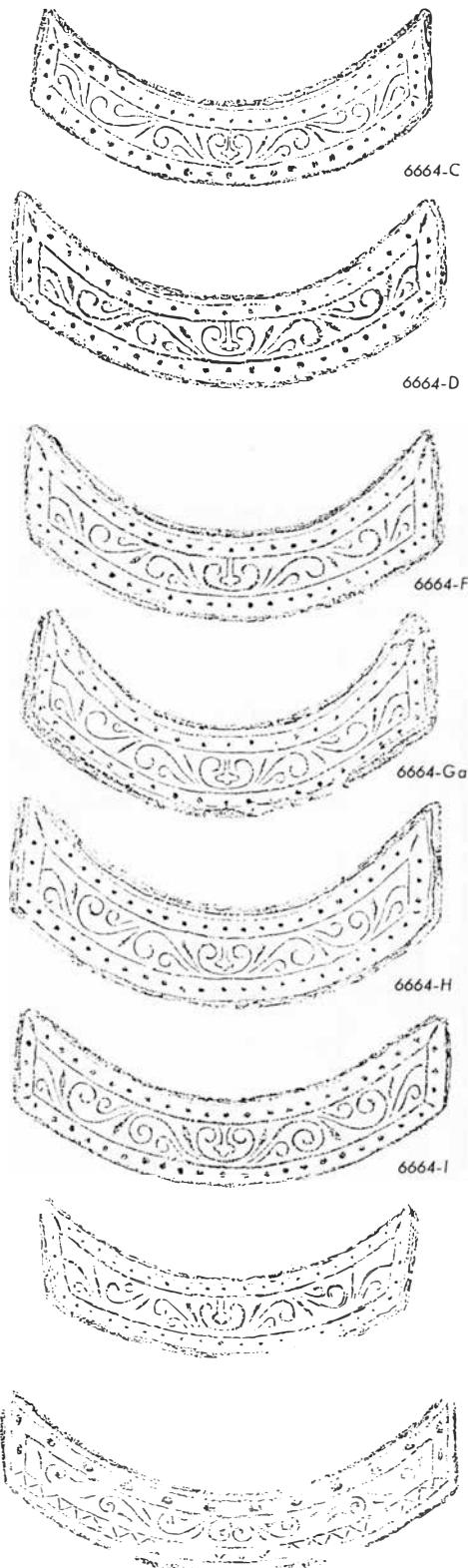


Fig. 36 均整唐草紋軒平瓦(2)

あり、B・C・E・Sが出土。Bは唐草が界線から流れ出るように派生する。唐草第3単位第1支葉も脇区界線に接する。内区が狭く、唐草第1単位の長さが6681中もっとも長い。頸は曲線頸。Cは中心飾の花頭の先端が、

- * 花頭をとり囲む唐草と接する。唐草が界線から立ち上るように派生する。唐草第3単位第1支葉も脇区界線に接する。唐草の巻きこみは小さく、左第3単位の主葉と支葉が直線的に平行する。頸は曲線頸。Eは中心飾がA・Bより横長で、唐草が界線から流れ出るように派生する

* (A・Bと)

草第3単位が小振り。唐草第3単位第1支葉が脇区界線に接する。頸は曲線頸。Sは超小型品。中心飾の花頭が小さく、基部は界線に接しない。唐草第3単位第1支葉を欠く。頸は直線頸。

* 口) 外区珠紋

6682型式はA種のみがある。唐草は3回反転、界線から流れ出るように派生する。唐草第3単位主葉が界線に接し第1支葉が巻きこむ。頸には段頸と直線頸の2者があり、本調査区出土のものは直線頸。

- * 6685型式は6682を小型化したもの。差異は唐草第3単位の主葉のみならず第1支葉も界線に接する点にある。A～Dの4種がありDが出土。Dは中心飾の花頭基部が左に傾く。花頭を囲む唐草の右半が左半より大きく、巻きが強い。上外区の珠紋が粗い。頸は段頸。
- * 三葉形 三葉形の中心飾を下から上へ巻きこむ唐草で囲んだもの。

6691型式は唐草が4回反転。唐草第4単位主葉が直線的で、第4単位第1支葉が巻きこむ。外区には珠紋を置く。頸は曲線頸。A・Bの2種がありAが出土。Aは中心飾の花頭基部上端が小さく二又に別れ、界線に接しない。内区幅がBより狭く、唐草の巻きこみも小さい。

下方に広がる五葉形 下から上へ巻きこむ唐草で五葉形の中心飾を囲む。

6694はA種のみがある。唐草は3回反転で、第3単位が脇区界線に接しない。唐草の主葉・支葉がともに界線から立ち上るように派生し、巻き込んだ先端が玉状を呈す。頸は段頸。

中字形 下から上へ巻きこむ唐草で中字形中心飾を囲んだ形のもの。

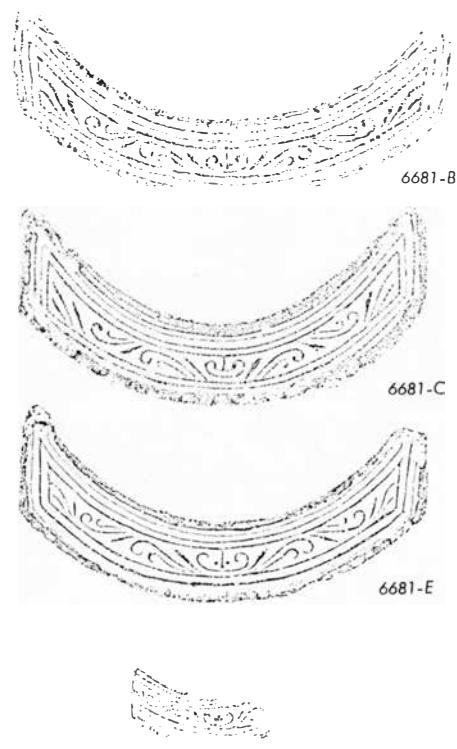


Fig. 37 均整唐草紋軒平瓦(3)

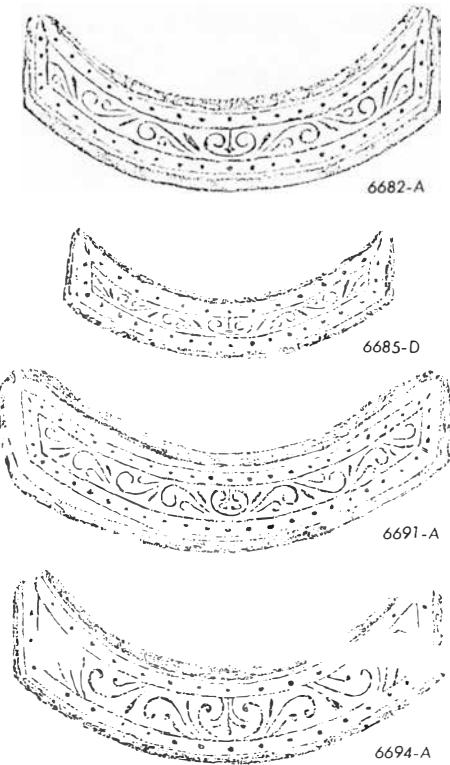


Fig. 38 均整唐草紋軒平瓦(4)

6704型式はA種のみがある。唐草は4回反転で、第4単位が脇区界線に接しない。唐草各単位は主葉・支葉の区別が明確ではなく、左第2単位のみ2葉で、他は3葉からなる。外区に珠紋を置き、頸は曲線頸。

逆V字形 下から上へ巻きこむ唐草で逆V字形を囲む。

6710型式は唐草が3回反転。界線から立ち上るように派生し巻きが弱い。第3単位主葉・第1支葉が脇区界線に接しない。頸は直線頸に近い曲線頸。A・Bの2種がありAが出土。Aは外区に珠紋を置き、上・下外区の珠紋間に各4カ所ずつX印を入れる。

逆牛頭形 上から下へ巻きこむ唐草で逆牛頭形を囲む。

6714型式はA種のみがある。唐草は薦状で各単位が連続し、5回反転。第5単位は脇区界線に接しない。第2単位に主葉と逆方向に反転する支葉を付す。第5単位にも主葉と逆方向に反転する支葉と遊離した支葉を付す。外区は珠紋帯。頸は曲線頸。

小字形 下から上に巻きこむ唐草で、小字形ないし逆小字形を囲んだもの。これには外区が素紋のものと珠紋のものとがある

イ) 外区素紋

6719型式はA種のみがある。唐草は5回反転で巻きが強く、各単位の第2支葉が長い。第5単位が脇区界線に接しない。平瓦の広端面を範に押しこんで瓦当紋様をつけている。したがって直線頸で、平瓦部凸面には瓦当面近くまで平瓦製作時の縄叩き目が認められる。

ロ) 外区珠紋

6721型式は内区紋様が6719に類似する。ただし6719に比して唐草の巻きが弱く、各単位の第2支葉が短かい。A, C~Kの10種があり、C・D・F・Ga・Gb・Hが出土。Cは中心飾の両支葉が上方に開く。この点はJ・Kと共に通するが、J・Kでは両支葉の基部が中央葉の基部近くにあるのに対し、Cでは両支葉基部が中央葉の中程の高さにある。脇区は無紋、頸は曲線頸。Dは中心飾の両支葉が太い半月形でやや上方に反り、両支葉が中央葉上半部と同じ高さにある。唐草の線が太く珠紋が大きい。脇区は無紋、頸は曲線頸。Fは中心飾の両支葉がほぼ水平で、両支葉の基部が中央葉の上端より上に出る。中央葉の真上・真下の位置に外区の珠紋がある。脇区は

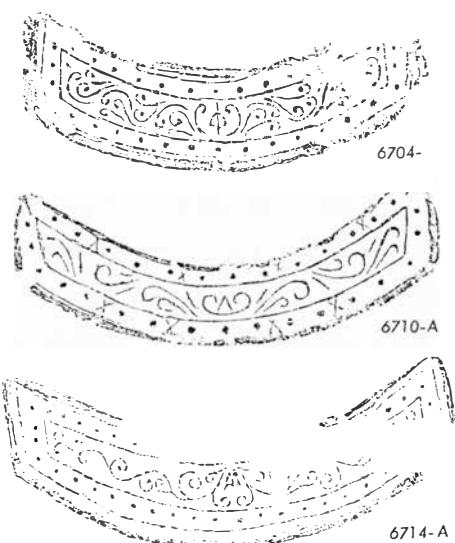


Fig. 39 均整唐草紋軒平瓦(5)



Fig. 40 均整唐草紋軒平瓦(6)

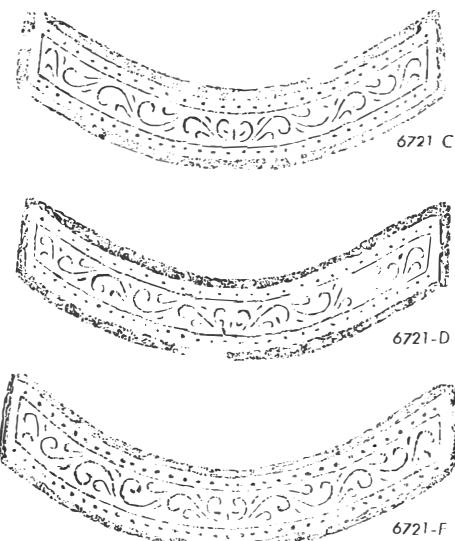


Fig. 41 均整唐草紋軒平瓦(7)

頸は段頸。Gは中心飾の両支葉が上向きの半月形ではほぼ水平。両支葉の基部は中央葉の上端のやや下にある。中央葉の真上・真下の位置よりもやや左に外区の珠紋がある。唐草右第5単位第2支葉がない。外区珠紋は小さく

- * 密に配され、珠紋の外側にさらに界線をめぐらす。脇区は無紋。頸は直線頸と曲線頸とがある。GにはGa・Gbがあり、Gbは外区の珠紋の外側の界線を削りとり直し線にかえる。Hは中心飾がFに似ており、中心葉の真下の位置に珠紋があるが、真上には珠紋がこない。唐草各単位の第1支葉は基部が短かく、脇区に珠紋を3個配する。頸は直線頸。

下向き矢印形 下から上へ巻きこむ唐草によって、下向きの矢印形を開んだもの。

6727型式は外区が珠紋。唐草は3回反転で、界線から

- * 立ち上るように派生する。唐草第3単位が脇区界線に接しない。頸は段頸。A・Bの2種がありともに出土。Aは中心飾と唐草各単位の主葉が大きい。中心飾の真上に珠紋がある。Bは中心飾と唐草各単位の主葉が小さい。中心飾の真上には珠紋がない。
- * **対葉花紋** 下から上へ巻き込む唐草で小さなバルメットを囲み、さらにその上に両側から内包するように松葉状の葉を対向させる。いわゆる対葉花紋である。¹⁾

6732型式は東大寺式軒平瓦である。外区に粗く珠紋をめぐらす。唐草は3回反転で、第3単位は脇区界線にと

- * りつかない。唐草の支葉数が多い。A, C~F, H~Mの11種があり、A・C・Qが出土。Aは対葉花紋が左右に分離する。唐草各単位は主葉・支葉の別がはっきりしており、第2単位第2支葉が2又に分れる。頸は曲線頸。CはAよりやや小型で珠紋も小さく、唐草の主葉・支葉
- * の巻きが弱い。また、唐草右第3単位第1支葉の数がCの方が1つ多い。Qは新種。唐草各単位の主葉・支葉の別がはっきりせず、第1単位第2支葉がなく、第2単位第2支葉が2又に分れない。Kとよく似るが、Kより内区幅が狭く、唐草が小振りである。直線頸に近い曲線頸で、平瓦部凸面は縦方向にヘラケズリし、平瓦部凹面の瓦当近くは横方向にヘラケズリし、以下は布目が残る。

桐葉形 下から上へ巻きこむ唐草で下向きの桐葉形を開む形のもの。

1) 対葉花紋については川勝政太郎「法華堂本尊の裝飾文様」(『法華堂の研究』) 1948, 岡本東

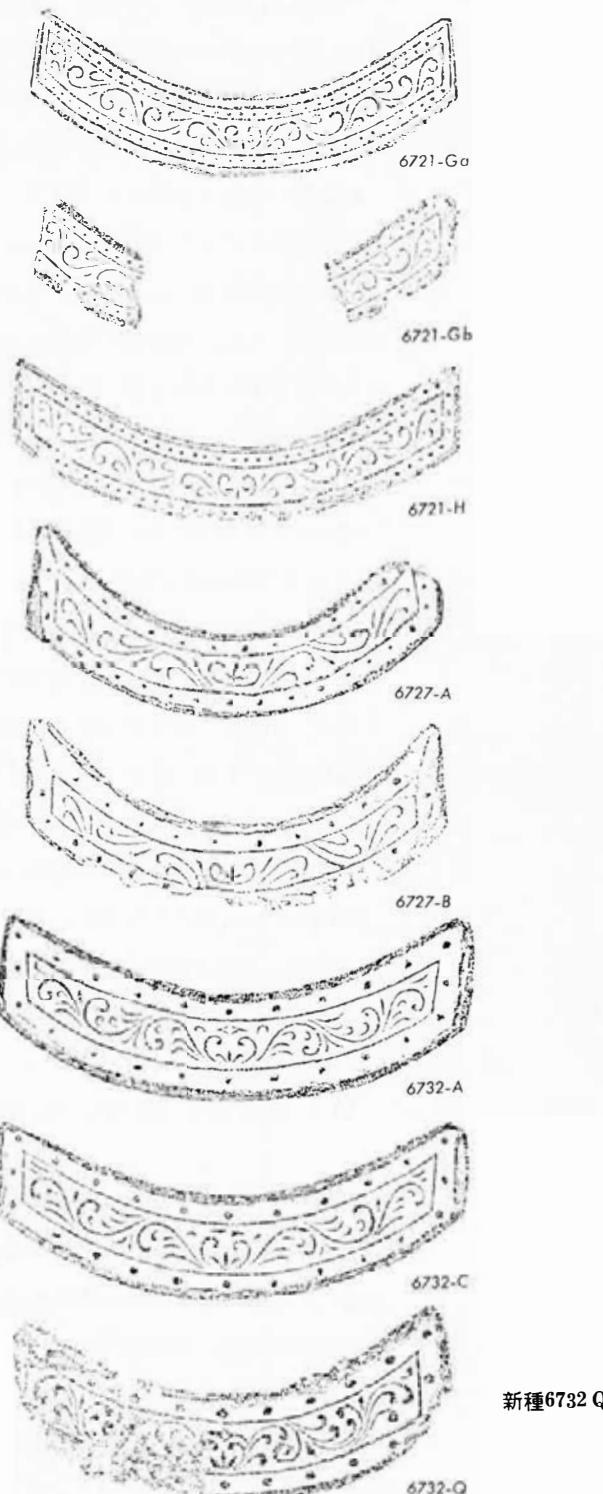


Fig. 42 均整唐草紋軒平瓦(8)

新種6732 Q

三 東大寺式軒瓦について—造東大寺司を背景として—」(『古代研究』9) 1976を参照。

6734型式はA種のみがある。外区は圈線を1本めぐらせる。唐草は3回反転で、第3単位が脇区界線にとりつかない。唐草の支葉数が多く、各単位の第1支葉は3個、第2支葉は1個ある。頸は直線頸。

桃実形 対向するC字形で桃実形を囲み、さらにその上に桃実形を置いた中心飾である

6761型式はA種のみがある。外区に粗い珠紋がめぐり唐草は5回反転。唐草第1単位は支葉がなく、第2～第4単位は第1支葉が1個、第2支葉が3個、第5単位は第1支葉が2個、第2支葉がない。頸は曲線頸

上向小字形 中心飾は線的な表現の3葉バルメット。

6763型式は外区に粗い珠紋をめぐらす。唐草は3回反転で、第3単位は脇区界線にとりつかない。頸は曲線頸。A・Bの2種がありAが出土。Bの方が唐草の各単位が崩れておらず、基本形は第1支葉2個、第2支葉3個であるが、Aでは右第2単位第2支葉が2個、左右第2単位第1支葉が1個、左第3単位第1支葉が3個になっている。

花弁形 中心飾が单弁の蓮弁風のもの。

6775型式はA種のみがある。外区に珠紋を粗くめぐらす。唐草は4回反転で、第4単位が脇区界線に接しない。第1単位には第2支葉がなく、第1支葉が1個ある。第2～第4単位には第1支葉がなく第2支葉が1個ある。頸は曲線頸。

D 道具瓦と塼 (PL. 59, Fig. 44)

面戸瓦 25点出土した。いずれも丸瓦製作後に生乾きの段階で加工し面戸瓦に作り替えたものである。形態はいわゆる蟹面戸で、左右下部を切り欠き中央部を舌状に突き出す。完形品 *はないが復原可能なものが2例あり、長さ29.6cm、幅17.2cmおよび長さ19.8cm、幅12.5cmである。凸面調整は、斜方向のハケメのもの1点を除くとすべてナデで、ナデの方向には縦と横とがある。第2次成形技法の判るものが12点ある。すべて縦位の縄叩き。他はナデないしハケメで第2次成形痕が完全に磨り消されているため不明である。凹面縁部は削って面取りし、その他の部分には布目圧痕を残す。

隅木蓋瓦 1点出土した。11.5cm×9.5cmの断片で、先端隅部にあたる。下面是平坦で、上面の縁辺部に高さ0.3～0.6cmの額縁状の枠をめぐらす。枠の幅は2辺で異なり、5.7cmと7.5cm。枠は内側が高く外へ向って緩く傾斜する。枠の中央部に幅1.5cm、深さ0.5cmの凹線をめぐらす。枠のない部分の厚さは2.9cm。2側面のうちどちらが先端木口面であるかは不明。

類例は大正の保存整備工事、第6次調査(6AAQ区・内裏地区)、第70次南調査(6AAE区・第2次大極殿東外郭地区)、第73次調査(6AAQ区・内裏地区)、第97次調査(6ABF区・推定第1次朝

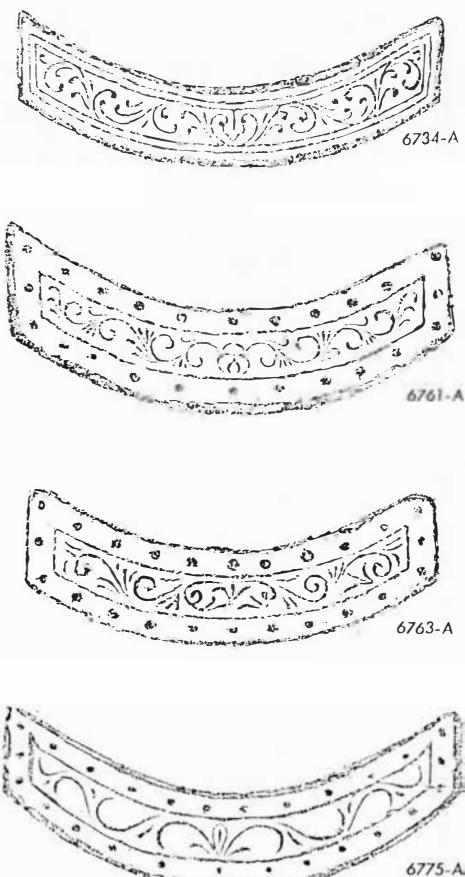


Fig. 43 均整唐草紋軒平瓦(9)

堂院地区), 第146次調査(6ABK区・推定第1次朝堂院地区南方)において出土している。第6次調査を扱った『平城宮報告III』では「異形埴」と報告したが、その後の出土例から隅木蓋と判明した。上記の諸例を参考に復原すると、長さ40cm、幅47cm、刳形の深さ19cm、刳形の2辺のなす角度87°で、かかりは刳形部のみにあり、幅2cm、深さ0.7cmとなる。

鬼瓦 20点出土したが、いずれも破片である。2種あり、そのうちわけは毛利光俊彦分類による平城宮I式Aが6点、平城宮II式A₁が13点、型式不明が1点である。

平城宮I式は鬼の全身をあらわす。鬼は顔を正面に向けて蹲踞し、舌を出す。腹部中央は半球形にあらわす。下頬に巻毛の鬚を配し、体に沿って断面鋸歯状の巻毛をめぐらす。大(A)と小(B)の2種がある。Aは胸・腕の筋肉の盛り上りや関節を写実的にあらわす。体部の巻毛の内側に幅広な傾斜面をつけるのが特徴。外縁は傾斜縁。

平城宮II式は鬼の顔面のみをあらわし、しかも顔面のすべてをあらわす。上・下の歯をむき出し、舌を噛んだ態につくる。下頬に放射状の鬚を配し、その外側に2列の巻毛をめぐらす。大(A)・小(B)2種があり、Aはさらに細部の差によってA₁・A₂に分れる。A₁は上瞼が二重で強く曲折し、額の力瘤を一連につくる。周囲の巻毛は巻きが強い。外縁は傾斜縁。

埴 59点出土した。そのうち、長さ・幅の双方ないし片方が判明するものが17点ある。法量*を基準にA～Dの4類に区分できる。Aは長さ30～31.3cm、幅22.4～23cm、厚さ6.3～6.8cmで7点出土。Bは長さ不明、幅17.6cm、厚さ7.5cmで1点出土。Cは長さ29.5cm、幅15.1～16.5cm、厚さ6.4～7.7cmで7点出土。Dは長さ不明、幅13.2～13.5cm、厚さ7.8～8.3cmで2点出土。4類ともにブロック状の粘土を型枠の中につめこんで形を作り、その後外面をヘラで調整している。

E 丸瓦・平瓦・文字瓦 (Fig. 45)

丸 瓦

完全なものはほとんどないが、破片から判断するとすべて玉縁丸瓦で、行基丸瓦は一片もない。第1次成形技法を基準に、粘土紐巻きつけ技法を用いるA類、確実な証拠を残すものは少いが粘土板巻きつけ技法を用いたと考えられるB類、小片のためA・Bどちらか不明のC類に

*毛利光俊彦「日本古代の鬼面文鬼瓦」(『研究論集VI』奈良国立文化財研究所学報第38冊) 1980。

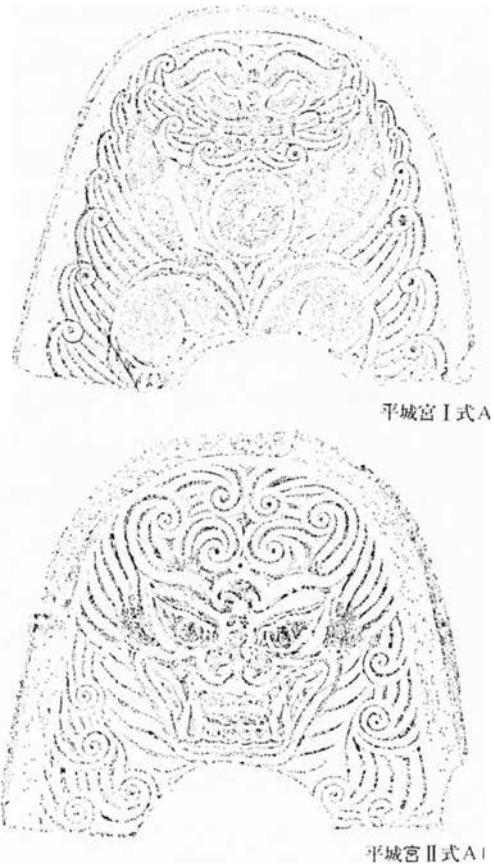


Fig. 44 鬼瓦

大別できる。いずれの類も第2次成形技法および凸面調整手法により以下の4種に細分できる。
 1) 縦位の縄叩き目が残るような叩きをおこなった後にナデを施すが、第2次成形痕を残すもの。
 2) ナデで第2次成形痕を完全に消し去ったもの。
 3) 縦位の縄叩き目が残るような叩きをおこなった後に横方向のカキメを施すが、第2次成形痕を残すもの。
 4) 横方向のカキメで第2次成形痕を完全に消し去るもの。各類各種ともに内面には布目圧痕をとどめる。側面 *
 調整手法は、側面全体にヘラケズリを施し平滑にするものが多いが、C類の2種・4種には分
 割截面と破面の凹凸をそのまま残すものが少數ある。また、ヘラケズリを施す際に側面の凹面
 側を面取りするものとしないものとがあり、前者の方がやや多い。

ii 平 瓦

平瓦は第1次成形技法を基準に、桶巻作りのA類と1枚作りと考えられるB類に大別できる *
 が、B類のばあいには確実な証拠がないものが多い。A類はさらに、粘土板桶巻作りのA₁類、
 粘土紐桶巻作りのA₂類、どちらか不明のA₃類に細別できる。各類で用いる第2次成形技法
 を、凸面に残る叩き日の種類を基準に分類すると、A₁・A₃類に平行叩き目、A₃類に格子叩き
 目、A₁・A₂・A₃・B類に縦位の縄叩き目、B類に横位の縄叩き目がある。いずれの類も内面
 に布目圧痕をとどめる。凸面調整手法は、A₁類は不調整のもののみで、A₂・A₃・B類には不 *
 調整のもの、ナデを施すもの、横方向のカキメを施すものの3者がある。ナデないしカキメを
 施すばあい、第2次整形痕を全く消し去るものと、そうでないものとがある。側面調整手法で
 は、側面全体にヘラケズリを施し平滑にするものが多いが、A₂類には分割
 截面と破面の凹凸をそのまま残すものが少數ある。また、ヘラケズリを施す
 際に側面の凹面側に面取りを施すものと、施さないものとがあり、A₁・B類
 では面取りを施すもののみである。

文字瓦 丸・平瓦に刻印を押捺したものが14点ある。ヘラ描きはない。

文字の種類は「修」が1点、「理」が10点、「伊」が1点、「人」が1点である。

修 「修」は陰刻で、平瓦の凹面に押す。刻印の中心は側縁から4cmの位置に
 あり、字の向きは側縁に直交する。刻印「修」にはa～gの7種類があり、
 本例はcで、2.90×2.95cmの大型の印である。第1画が短く屈折し、旁の
 上部が扁と接し、各字画の幅が広い。²⁾

理 「理」は陽刻で、平瓦の凹面に押す。押捺部位の判明するものが6点あり、
 刻印の中心位置は側縁から3.7～5.9cm、端縁から4.6～7.6cmの範囲内にある。
 これらのうち広端縁・狭端縁の違いが判るものが2点あり、いずれも狭端縁
 である。刻印「理」にはa～lの12種類が知られ、そのうちhが5点、iが
 3点、lが2点出土した。hは1.80×1.85cmで扁の第3・4画が太い。iは
 2.35×2.25cmの大型の印で、文字が輪郭に対して右傾し、扁が全体に太い。
 lは1.7×2.3cmの横長の印で、扁と旁が分離し、扁の第1・3・4画が太い。

伊 「伊」も陽刻で、平瓦の端面に押す。広端面か狭端面かは不明である。刻



Fig. 45 文字瓦 *

1) 陽刻・陰刻は瓦面にあらわれた文字の状態で
 いう。また大きさは瓦面での寸法である

2) 文字瓦の分類は『奈良国立文化財研究所基準
 資料V』瓦編5による。

印「伊」は1種類しかなく、 1.65×1.75 cmとやや横長。旁の第4画が太い。

「人」も陽刻で、丸瓦の凸面に押す。刻印の中心位置は狭端縁から8cmあり、字の向きは側縁に直交する。刻印「人」は1種類しかなく、 1.80×1.70 cmのやや縦長の印である。第1・2画の下辺が不揃いで、刻印の左右辺・下辺部に盛りあがりがある。
人

- * これらの刻印を押捺した平瓦はいずれも小片であり、第1次成形技法は明瞭でない。しかし観察し得た範囲では、粘土紐巻きつけの痕跡・粘土板巻きつけ時の合わせ口・布の綴じ合わせ痕跡・模骨痕などを残すものはない。なお刻印「理」を押した平瓦は、宮の西面中門（佐伯門）の東側で6点出土している。この門の修造に「修理」関係の官司がかかわった可能性を考えられるることは、すでに『平城宮報告IX』で述べたところである。

* F 小 結

i 軒瓦の編年と組合せ関係

平城宮出土軒瓦の全般的時期区分および個々の軒瓦の年代観は、『基準資料II』（瓦編2）の解説において提示し、その後『平城宮報告XI』で一部改訂した。今回報告した発掘区の調査成果からは、軒瓦の年代観を改訂したり、年代不明であった軒瓦の年代を決定したりするための

- * 材料は得られなかった。そこで、ここでは従来の成果に準拠することとし、出土した軒瓦の編年的位置づけを Tab. 3 に示したが、表作成上の留意点があるので以下に列挙する。

編年的位置づけ

- a) 6303Bは、すでに述べたように6303Aよりも6284A・D・Fに酷似する。6303Aは聖武朝難波宮所用の軒瓦で、平城宮軒瓦編年第II期に属すが、6284A・Dは第I期であるため、6303Bも第I期とした。

- * b) 『平城宮報告XI』では6304C—6664Kが組合うとした。ところが以前には6304Cは6664D・Fと組合せ第II期に属すと考え、6664Kは6664G～J・L～Nとともに第I期に属すとしていたのである。したがって、両者が組合うとすれば、6304Cの年代が遅るか、6664Kの年代が下るかのどちらかでなければならない。今回の調査で出土した6664G・II・Iは内区紋様が6664Kと類似するので6664Kの年代に合わせるべきであろうが、ここでは従来通り第I期とした。

- c) 6225A～C・L、6663A～Cの年代を『基準資料II』の解説ではすべて第II期としていた。『平城宮報告XI』では6663A・Bのみ第II期に残して6308に組合うものとし、6225A・C—6663Cを第III期に下げた。6225A・C—6663Cは第2次大極殿院・朝堂院所用の瓦であるが、平城宮第152次調査の結果、第2次大極殿院の閑門・南回廊では6296A—6691Aの組合せを用いていたことが判明した。したがって6296A—6691Aの年代も6225A・C—6663Cと同時期とする。なお、山背恭仁宮・法隆寺東院では平城宮軒瓦編年第II期の段階ですでに6691Aを使用していたが、平城宮での使用は還都後のことであるという見解を『平城宮報告XI』で採用しており、これに従う。

ところで、仮に6296Aを複弁蓮華紋ではなく単弁蓮華紋軒丸瓦とみなせば、単弁12弁蓮華

1) 『平城宮報告XI』 p. 242～243。

第Ⅰ期 和銅元年～ 養老5年	第Ⅱ期 養老5年～ 天平17年	第Ⅲ期 天平17年～ 天平勝宝年間	第Ⅳ期 天平宝字元年～ 神護景雲年間	第Ⅴ期 宝龟元年～ 延暦3年	時期不明
6231B		6133A・B・Da・Db	6235C		6130B
6273B	6301C	6134A			6131A
軒 6274Aa	6308A・B・I	6225A・B・C・L			6133・M・P
丸 6275A・C・D	6311A・B・D	6282Ba・Db・Fa・Fb G・Hb			6225E
6278B・Ch・E	6313A・B・C				6307B・I
6279A・B	6285A	6296A			6316K
JU 6281Ab・B	6291A				
6284A・C・D・E・F	6314B				
6303B					
6641Ab・C・E・F・L	6575A	6663C	6714A		6663F
軒 6642A・B・C	6663A・B	6681B・C・E・S	6732Q		6704A
6643Aa・B・C	6664D・F	6691A	6761A		6727A・B
6647A・C・D・G	6666A	6694A	6775A		6731A
6661C	6671C	6710A			6763A
6664C・Ga・H・I	6682A	6719A			
JU	6685D	6721C・D・F・Ga・Gb・H 6732A・C			

Tab.3 軒瓦編年表

紋となる。子葉が細長く、間弁が人字形を呈する点などが6320Aaに類似する。6320Aaは恭仁宮造営時に新調した軒丸瓦（恭仁宮KM01）で、恭仁宮では軒平瓦6691A（KH01）と組合させて使用した。平城宮では6691Aは6296Aと組み合っている。上原真人は「平城6296Aは瓦当文様においてKM01よりも後出的で、平城6133系の先駆型式と思われる」と指摘しており、注目される。

d) 6681は内区紋様が6682と類似し、外区紋様は6663と同じである。『基準資料II』の解説では、内区の紋様構成が第Ⅱ期に属する6682と同じでやや後出的な要素があることから、第Ⅱ期から第Ⅲ期にかけての頃のものとした。6663が第Ⅱ期から第Ⅲ期のものであるので、6681に第Ⅱ期から第Ⅲ期の幅をもたせて矛盾はないが、6681の内区紋様に6663A・Bよりも退化した形跡が認められることを勘案し、Tab.3では第Ⅲ期とした。

平城宮内における軒丸瓦・軒平瓦の組合せ関係は、原則的には一定地域内における出土頻度の高いものを選んで判断している。本調査地域のはあい、軒丸瓦と軒平瓦の出土点数に大きな開きがあるため、各型式の出土点数の多寡が、かつて屋根に葺かれていた実態をそのまま示さない可能性がある。したがって、各型式の出土比率を比較してみても無意味であるかもしれないが、一応試みてみた。その結果がFig.46である。馬寮地区の内・外それぞれの区域における出土比率をみると、馬寮内では平城宮軒瓦編年第Ⅲ期に属する6282(11.6%)—6721(13.4%), 6225(9.1%)—6663C(8%)の2組が成立し、前者は推定大膳職地区、後者は第2次大極殿・朝堂院地区での組合せと一致する。第Ⅱ期の軒平瓦では6664D・F, 6663A・Bが比較的多く、それぞれ6311・6308と組合う可能性があるが、出土点数が少ないため断定できない。第Ⅳ期の軒丸瓦6133・6134は推定大膳職地区・第1次大極殿地区第Ⅱ期で6732と組合うことが判明しているが、馬寮内では6732はほとんど出土せず、組合せは不明である。

馬寮外については、興福寺式系統の6301Cと6671Cが、出土比率には差があるものの、紋様系統が一致する点からみて組合うものと考えられる。第Ⅲ期では、6225—6663C, 6282—6721

1) 京都府教育委員会『恭仁宮跡発掘調査報告 瓦編』1984。

の2組の他に6719Aが多い。6719Aは従来から組合う軒丸瓦が不明である。6719Aの大半が馬寮東官衙南半部の西限をなす南北溝SD5960から出土しているが、SD5960から出土した軒丸瓦の中にも特に候補となるものはない。馬寮東官衙の本格的な調査に期したい。

ii 遺構の時期決定に役立つ資料

- * 軒瓦のうち遺溝に伴うものはごく僅かで、大部分は整地層から出土している。後者は二次的に移動していることが予想される。軒瓦の時期区分に基いて、軒瓦の時期別の分布状況を調べ、その変化のあり方と遺構配置の時期的変化との間に何らかの対応関係が認められるか否か検討した結果、両者は対応しないことが判明した。したがって、軒瓦の分布を手懸りにして個々の建物について瓦葺か否かを決定することや、特定の建物に用いられた瓦の型式を決定すること
- * こと、ひいては建物の時期を決定することは困難である。

ところで、掘立柱建物の柱掘形や柱抜取痕跡から出土した軒瓦が少数ながら存在する (Tab. 4)。もちろん、ある柱掘形ないし柱抜取痕跡から出土した軒瓦のうち、最新のものがその穴を掘削した年代の上限の一点を示すに過ぎないのであって、軒瓦の年代から建物の建立年代が

遺構出土の
軒瓦

遺構番号	出土軒瓦・時期	備考	遺構時期区分	遺構番号	出土軒瓦・時期	備考	遺構時期区分
SB5956	6641C I			SB6385	6663A II		
	6719A III	柱抜取痕跡内			B II		
SB6180	6664D II		II		6282G III		
SA6315	6664F II				6710A III		III
SB6425	6664C I				6721C III		
SB6450	6225 III	柱掘形内			D III		
SA5950	6663A II	柱掘形内			F III		
	6671C II				G III		
SD5960	6274Aa I			SE6166	6721C III		III~IV
	6278C I			SB3690	6273B I		
	6279B I				6284C I		
	6641C I			SB36100	6663C III	柱掘形内	
	6664F II				6303B I	柱掘形内	
	6282F III				6641C I		IV
	6719A III			SB6173	6291A II	柱抜取痕跡内	
	6316K ?				6225A III		
SD6152	6225A III			SB6177	6663B II		
SB6185	6664D II			SB6430	6664F II	柱掘形内	
	6721 III		III	SD5961	6131A ?		
SK6350	6663B II			SB6386	6721C III	柱掘形内	V
	6664D II			SB6101	6304A II	柱掘形内	
	F II			SE6143	6761A IV	井戸埋土内	
	6282Fa III			SE6300	6664I I		
	6691A III			SK7040	6225B III		
	6704A ?				6663C III		
SB6360	6664G I			SK7041	6281B I		宮廃絶後
	6311A II				6641C I		
	6721C III				6225A III		
SD6477	6231 I				6663C III		
	6641C I			SE7094	6643Aa I		
	6664F II				6671C II		
	6307B ?			SK7097	6714A IV		

Tab. 4 遺構から出土した軒瓦一覧表

判明するわけではない。しかし、Tab. 4 にまとめた結果と後述の遺構の変遷とは矛盾しない。すなわち、ある建物の年代がその建物の柱掘形から出土した軒瓦の年代を遡らないという原則は保たれている。なお、遺構時期区分第II期（奈良時代初期）の SB5956 から軒瓦編年第III期の 6719A が出土しているが、これは柱抜取痕跡からの出土であり、建物の解体が奈良時代中頃以降であることを示すものである。

*

iii 馬寮地域特有の軒瓦の存否

前節までに報告した軒瓦の大半は、平城宮内で通常出土するものであるが、6301C・6671C・6719A の 3 種は、本調査地域で比較的多く出土し、その他の地区ではあまりみられない型式である。これらははたして「馬寮地域の瓦」と呼べるものであろうか。

分布状況を検討すると、6301C は馬寮内で 1 点、馬寮外で 19 点、6671C は馬寮内で 5 点、馬寮外で 13 点、6719A は馬寮内で 8 点、馬寮外で 17 点となり、むしろ馬寮外に多い。しかも馬寮外出土のものの大半は馬寮東官衙西辺部の SD5960 や、築地 SA6150 に伴う雨落溝 SD6152 から出土しており、この築地に葺かれていた可能性が大きい。したがって、馬寮地域独特の軒瓦であるとは言えないことになる。

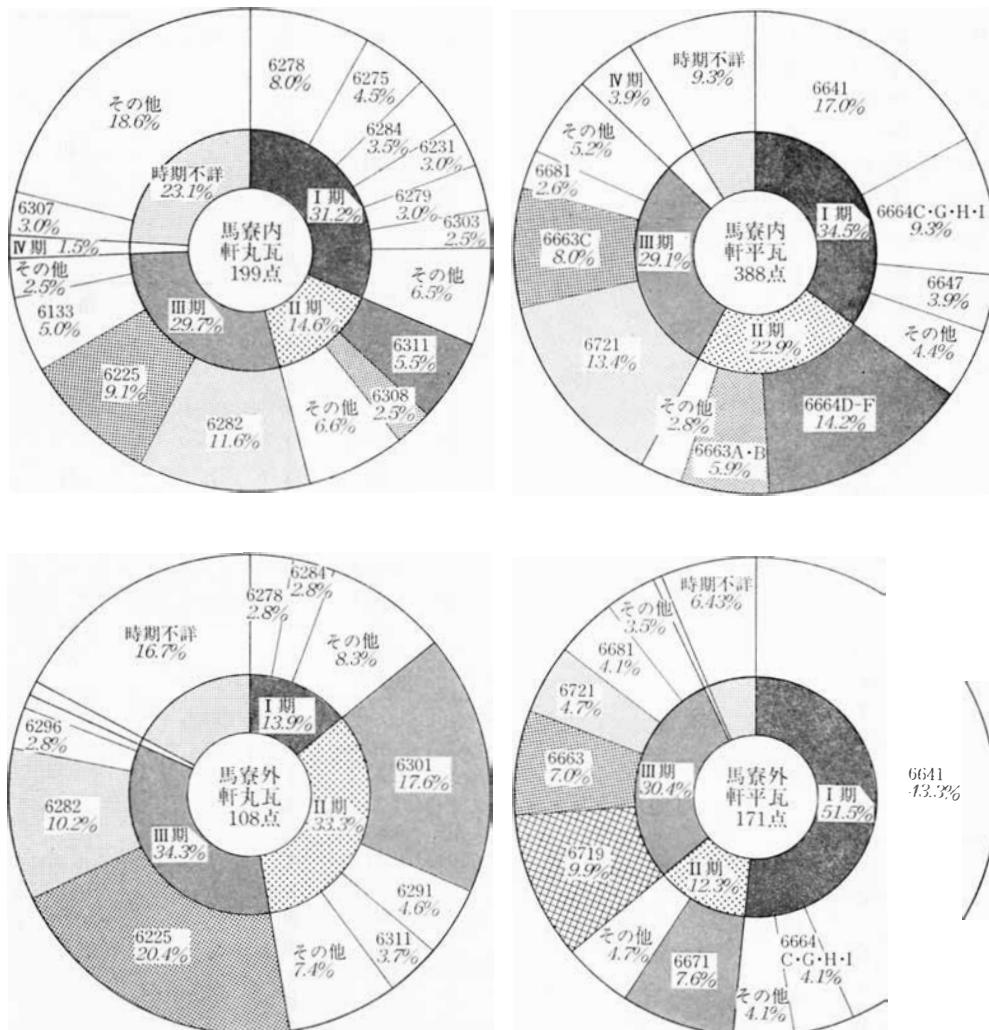


Fig. 46 軒瓦の出土比率（型式名は出土率2.5%以上の型式のみ表示）